

9 山田神社門前遺跡群 (A地点)

所在地：山田字下馬場 410 番 2 外 2 筆
 調査原因：専用住宅
 対象面積：281.49㎡
 調査日：令和3年11月25日～26日
 調査者：中村安宏

調査地は、小岱山から南へ延びる丘陵上に位置する標高約17mの地点である。以前はブドウ畑として利用されていたようである。現地確認の時点で、古代以降とみられる須恵器小片を表採している。

工事の内容は、専用住宅であるが、駐車場部分で深さ約1.2mの切土が生じるため、切土範囲を中心に2か所のトレンチを設定し、確認調査を実施した。

その結果、土層は表土、旧耕作土層下位に基盤層及び客土層を確認した。この客土層は、ブドウ畑に造成された際に切り盛りされたものと考えられ、支柱用の石材などが含まれている状況であった。

いずれのトレンチからも遺構・遺物は確認できなかった。造成の際に基盤層まで削平し、両側を埋めながら敷地を拡張したものとみられ、埋蔵文化財は残存していないものと判断される。

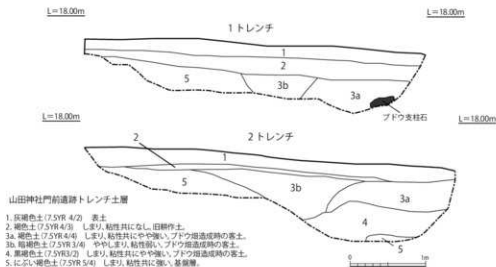
このような状況であることから、その後の処置は慎重工事となった。



第33図 山田神社門前遺跡群 (A地点) 調査地位置図



第34図 山田神社門前遺跡群 (A地点) トレンチ位置図



第35図 山田神社門前遺跡群 (A地点) トレンチ土層図

10 年の神道跡 (A地点)

所在地：岱明町野口字西平 2938 番 1

調査原因：宅地造成

対象面積：1,840㎡

調査日：令和 3 年 12 月 6 日～12 月 10 日

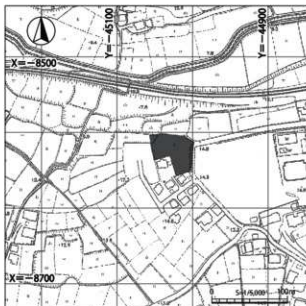
調査者：中村安宏

調査地は、友田川左岸の丘陵上に位置する標高約 15 m の地点である。大野小学校運動場の西側にあたり、現況は畑地や荒地となっていた。

当遺跡は、弥生時代中期を中心とする集落遺跡で、昭和 28 年に田邊哲夫氏によって東側に残存する支石墓（市指定史跡）が発掘調査されている。また、昭和 42 年には造成中に田添夏喜氏によって、新たな支石墓が確認され、主体部の裏棺内からゴホウラ貝腕輪 7 点（市指定有形文化財）が発見されたことで知られている。敷地東側は、平成 28 年度に市道拡幅工事に伴い確認調査を実施しているが、埋蔵文化財は確認されていない。

工事の内容は、位置指定道路を伴う分譲地（6 区画分）の宅地造成で、敷地全体に約 0.5 ～ 1.3 m の切土が生じるため 6 か所のトレンチを設定し、確認調査を実施した。

その結果、いずれのトレンチにおいても埋蔵文化財は確認されなかった。各トレンチの土層堆積状況から、当該地は本来南西から北東へ傾斜する地形であったが、耕作地化の際に、敷地南西部で基盤層まで削平し、その掘削土を敷地北東部に充填することで平坦地化したものと考えられる。遺構は検出されなかったが、弥生時代中期の築底部片 1 点が出土したのみである。これらのことから、当該地においては、大幅な土地の改変を受けており、埋蔵文化財は残存していないものと考えられる。よって、その後の処置は慎重工事となった。



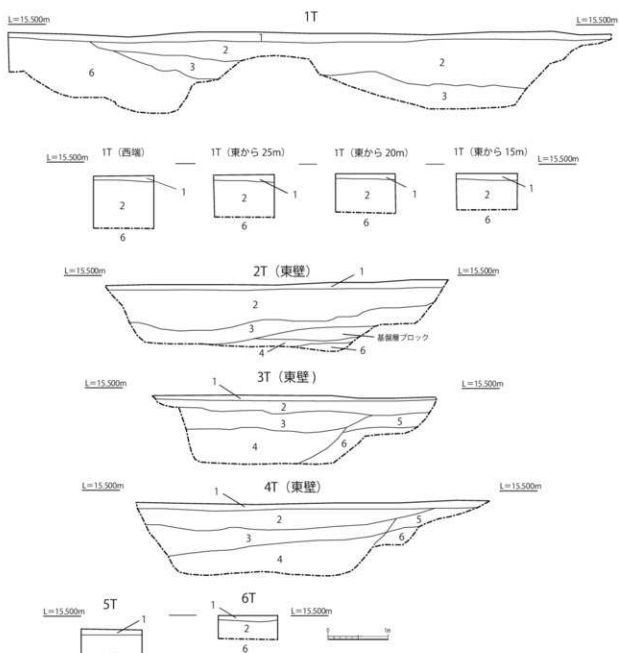
第 36 図 年の神道跡 (A 地点) 調査地位置図



第 37 図 年の神道跡 (A 地点) トレンチ配置図



写真 19 年の神道跡 A 地点調査地 (北から)



年の神道跡 A 地点トレンチ土層

1. 褐色土 (7.5YR 5/1) しまり、粘性弱になし、表土。
2. 灰褐色土 (7.5YR 3/2) しまり強く、粘性なし、基礎土層の土をブロック状に含む、造成土。
3. 灰褐色土 (7.5YR 4/2) しまり強く、やや粘性強い、造成土。
4. 灰褐色土 (7.5YR 3/3) しまり強く、粘性強い。
5. 灰褐色土 (7.5YR 3/2) しまり、粘性共にやや強い。
6. 浅黄色土 (2.5Y7/4) しまり、粘性共に強い、基礎土層。

第 38 回 年の神道跡 (A 地点) トレンチ土層図

写真 20 年の神道跡 A 地点調査状況



1 トレンチ調査状況 (西から)



2 トレンチ調査状況 (北から)



3 トレンチ調査状況 (南西から)



4 トレンチ調査状況 (北から)



5 トレンチ調査状況 (西から)



6 トレンチ調査状況 (南東から)

1 1 山田神社門前遺跡群 (B地点・西林坊)

所在地：山田字上馬場 164 番 2

調査原因：西林坊覆屋新設

対象面積：38㎡

調査日：令和4年1月26日～28日

調査者：中村安宏

調査地は、小岱山から南へ延びる丘陵上に位置する標高約 31 m の地点である。本事業は、平成 26 年度から市の補助事業として実施されている、玉名市指定重要有形民俗文化財「山田白山宮比売神十二坊祭祀記録帳 附 十二坊塔碑」の保存整備に伴う、各石造物への保護覆屋設置である。中世期に現在の山田日吉神社周辺に 12 の坊が所在したことを今に伝えるもので、一部で所在地の移動が認められるが、現在も各坊守により守護尊として祀られている。

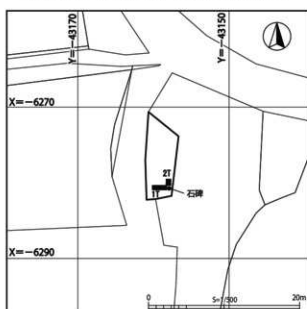
今回の工事は、この十二坊塔碑のうち、西林坊で花崗岩自然石（高さ約 86 m）を石碑としており、文字なども彫られていない。

この石碑周辺の切土（面積：16㎡、深さ：1.1 m）を行う計画であるため、石碑を中心に 2 か所のトレンチを設定し確認調査を実施した結果、遺構は認められず、遺物は土器・青磁の細片が少量出土した。

工事の内容は、切土後に覆屋を設置し、石碑を再度、覆屋内に移設するものである。今回の調査では、切土の深度 1.1 m については埋蔵文化財が認められなかったものの、工事立会となった。その後の工程で、立会を行ったが埋蔵文化財は確認できなかった。



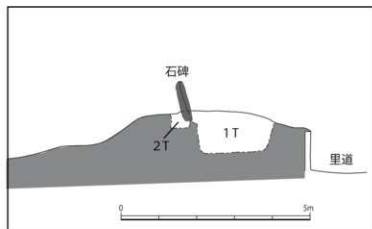
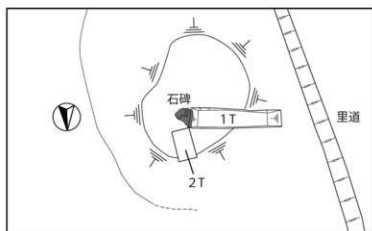
第 39 図 山田神社門前遺跡群 (B地点) 調査地位置図



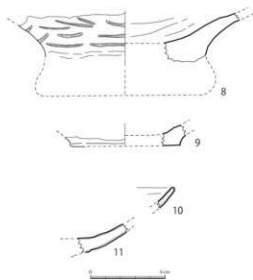
第 40 図 山田神社門前遺跡群 (B地点) トレンチ配置図



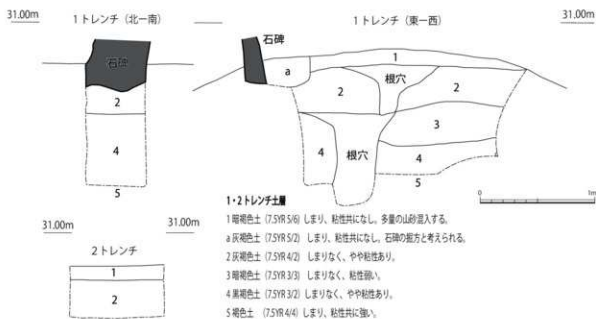
写真 21 西林坊調査前状況 (北から) と 1 トレンチ (西から)



第41図 西林坊トレンチ平面・断面図



第42図 西林坊出土遺物実測図
(縄文土器・土師皿・青磁片)



第43図 西林坊トレンチ土層図

1.2 寺田久保遺跡

所在地：玉名市寺田字久保 384.386-1
 調査原因：宅地造成（分譲地7区画分）
 対象面積：2503.51㎡
 調査日：令和4年2月15日～17日
 調査者：中村安宏

調査地は、菊池川左岸の伊倉丘陵性台地上に位置する標高約51mの地点であり、西側は深い谷となっている。また、北東側には世間部塚古墳などが所在し地下式坑も発見されている（第III章参照）。

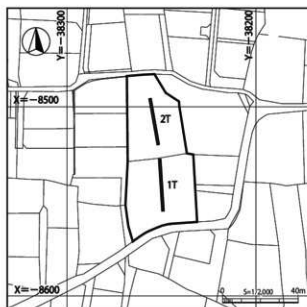
当該地の現況は畑となっており、工事の内容が10区画分の宅地造成で、位置指定道路部分において掘削を伴うことから、2か所のトレンチを設定して確認調査を実施した。

その結果、1トレンチにおいて時期不明の溝を1検出し、須恵器の破片が出土したが、その他の埋蔵文化財は確認できなかった。溝は幅約1.2mで、深さは30cmまで確認したものの、さらに深くなる可能性がある。東西方向へ延び、丘陵を断ち切るように掘られているものと想定されるが、その性格は明確でない。当遺跡が古代以降、中世を中心とした集落跡ならば、区画や排水用の可能性がある。

工事の内容は、大部分が盛土による宅地造成であり、溝が検出された地点は位置指定道路の側溝などが計画されているものの、遺構検出前まで掘削が及ばないことから、その後の処置は慎重工事となった。



第44図 寺田久保遺跡調査地位置図



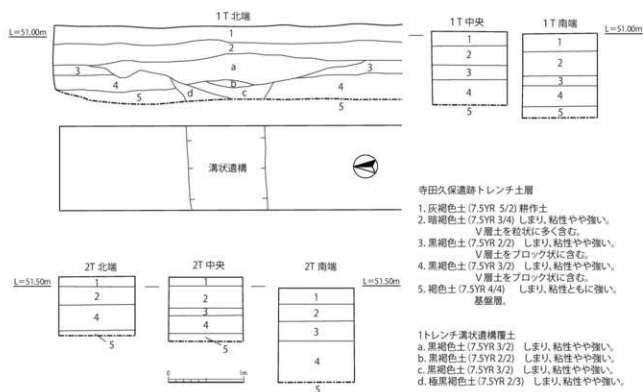
第45図 寺田久保遺跡トレンチ配置図



写真22 寺田久保遺跡調査地（南西から）



第46図 寺田久保遺跡出土遺物実測図



第 47 図 寺田久保遺跡トレンチ土層図

写真 23 寺田久保遺跡調査状況



1 トレンチ調査状況 (北から)



1 トレンチ調査状況 (南から)



1 トレンチの溝核出状況調査状況 (西から)



2 トレンチ調査状況 (北から)

1.3 高岡原遺跡

所在地：玉名市岱明町野口字塚原 665-1.66

所在地：中尾宇天神木 329-1

調査原因：宅地造成

対象面積：1.199㎡

調査日：令和4年3月2日～3月4日

調査者：中村安宏

調査地は、境川左岸の玉名台地上に位置する標高約23mの地点である。地目は畑地となっているが、耕作放棄地となっている。

分譲地計画で進入路、駐車場、擁壁工事において切土が発生する部分の4か所にトレンチを設定して確認調査を実施した。

その結果、駐車場部分の1トレンチにおいて溝状遺構1条を検出した他、各トレンチで土器細片等の遺物が出土した。この溝状遺構については、時期や深さなど性格を把握するため、トレンチを拡張して人力で掘り下げ完掘に至った。溝の長さは2m、幅は約0.6～1mで、深さは約0.45mが残存しており、埋土から古代の須恵器片、時期不明の土器小片数点が出土した。

また、各トレンチの土層堆積状況から当地の旧地形は、台地平坦部から南への斜面移行部であったと推測され、その後には敷地北側を削平して平坦に整地したものと想定される。斜面移行部であったことから、元々遺構密度は薄かったうえに、削平を受けたことで溝の下部のみが残存している可能性が高い。施工時に影響を受ける範囲で検出された溝は既に完掘しており、その他は遺構が確認されていないことから慎重工事となった。

溝から出土した須恵器の裏とみられる破片（第53図・1）は、内面の叩きに、いわゆる車輪文が認められた。これは荒尾産須恵器の特徴といわれているもので、9世紀の所産とされる。平成11年度における調査区でも溝の周辺から、同様の車輪文が施された須恵器裏片が出土しており、今後も詳細な調査が必要であるが、9世紀代において荒尾産の須恵器が玉名地域に流入していたことが想定される。



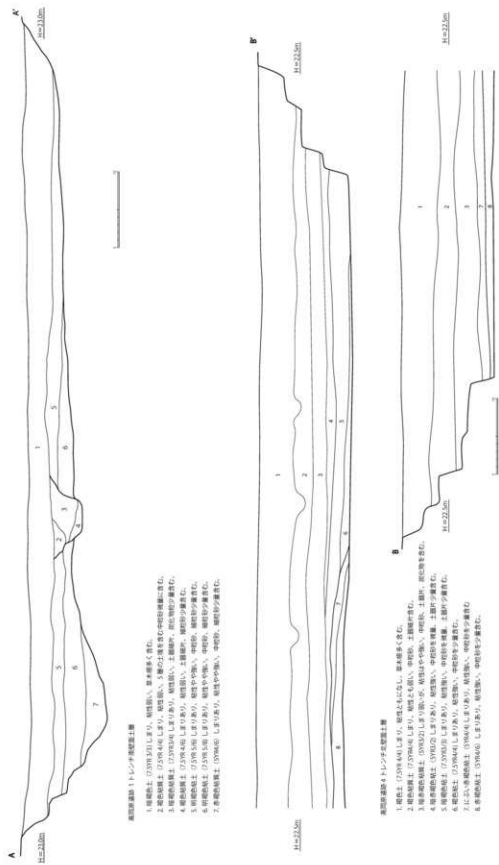
第48図 高岡原遺跡調査地位図



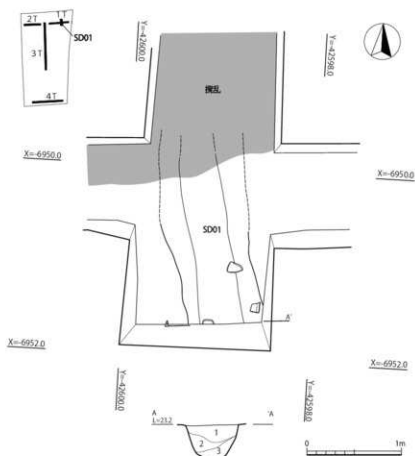
第49図 高岡原遺跡トレンチ配置図



写真24 高岡原遺跡調査状況（南から）



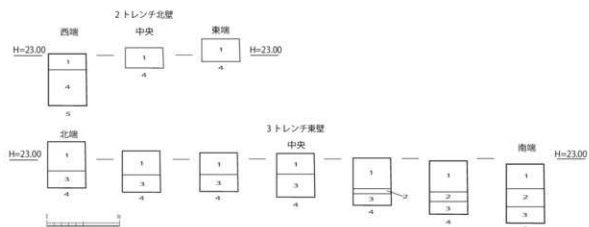
第50図 高岡原遺跡トレンチA断面図①



1 トレンチ溝状遺構 (SD01) 土層

1. 褐色粘質土 (7.5YR 4/4)。
しまり、粘性弱い、5層の土塊を含む中粒砂微量を含む。
2. 暗褐色粘質土 (7.5YR3/4)。
しまりあり、粘性弱い、土器細片、炭化物粒少量含む。
3. 褐色粘質土 (7.5YR 4/6)。
しまりあり、粘性弱い、土器細片、細粒砂少量含む。

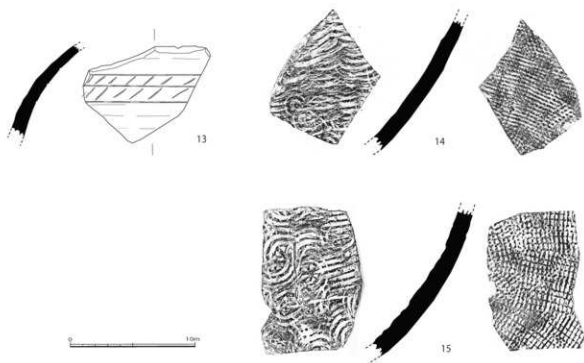
第 51 図 1 トレンチ溝状遺構平面・断面図



2・3 トレンチ土層

1. 暗褐色土 (7.5YR 3/3) しまり、粘性弱い、草木根多く含む。旧耕作土か。
2. 黒褐色土 (7.5YR 3/2) ややしまり、粘性有する。土器細片わずかに含む。
3. 暗褐色土 (7.5YR3/4) しまりあり、粘性強い、土器細片わずかに含む。
4. 明褐色土 (7.5YR 5/6) しまりあり、粘性強い、細粒砂少量含む。遺構検出面。
5. 明褐色土 (7.5YR 5/8) しまりあり、粘性強い、中・細粒砂少量含む。基盤層。

第 52 図 高岡原遺跡トレンチ土層図②



第53図 高岡原遺跡出土遺物実測図

写真25 高岡原遺跡調査状況



1 トレンチの溝検出状況（西から）



1 トレンチ拡張部の溝検出状況（北西から）



溝内の遺物出土状況（北西から）



3 トレンチ調査状況（北から）

14 年の神遺跡 (B 地点)

所在地：信明町野口 2460 番 1

調査原因：調査依頼

対象面積：23,480㎡

調査日：令和4年3月8日

調査者：宇田員将

調査地は、友田川左岸の丘陵上に位置する標高約14mの地点である。現況は、大野小学校の敷地内となっており、運動場の西端にあたる。

この東側では、令和3年度に宅地造成に伴う発掘調査を実施しており、弥生時代中期の竪穴建物跡や土坑、柱穴などが検出され、弥生土器の他に勾玉や磨製石剣、砥石、立岩産石砲丁、今山産石斧、赤彩土器などと共に県内で初めて石製のおもり（天秤権）が出土しており、交易の拠点的な集落であったことが想定される。

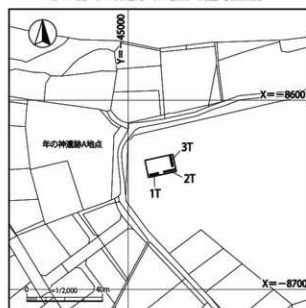
当該地では建物予定地に3か所のトレンチを設定して確認調査を実施した。その結果、土層は小礫や砂粒を含む粘質土や砂質土が約2m下まで堆積しており、埋蔵文化財は確認できなかった。

敷地は小学校の校庭建設時に大幅な切土造成がなされており、既に削平を受けた状態であることから埋蔵文化財は残存していないものと考えられる。

工事の内容は、学童保育施設の建設であるが、確認調査の結果から慎重工事となった。



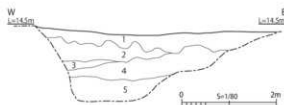
第54図 14年の神遺跡 (B 地点) 調査地位位置図



第55図 14年の神遺跡 (B 地点) トレンチ配置図

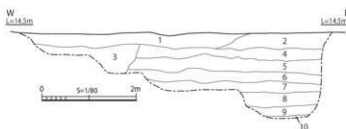


写真26 14年の神遺跡 B 地点 1・2 トレンチ (南から)



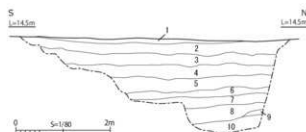
1 トレンチ北壁面土層

- 1 黄褐色砂質土 (10YR 5/6) 中粒砂主体。しまりあり。粘性なし。
- 2 黄褐色粘質土 (10YR 5/6) しまりあり。粘性あり。小礫少量含む。黄褐色土ブロック含む。
- 3 暗褐色粘質土 (10YR 3/3) しまりあり。粘性あり。小礫少量含む。
- 4 暗褐色粘質土 (10YR 3/3) しまりなし。粘性あり。小礫少量含む。細粒砂多く含む。
- 5 灰黄褐色粘質土 (10YR 4/2) しまりなし。粘性あり。小礫少量含む。細粒砂・粗粒砂多く含む。



2 トレンチ北壁面土層

- 1 黄褐色砂質土 (10YR 5/6) 中粒砂主体。しまりあり。粘性なし。
- 2 黄褐色粘質土 (10YR 5/8) しまりなし。粘性あり。中粒砂少量含む。
- 3 暗褐色粘質土 (10YR 3/3) しまりなし。粘性あり。小礫少量含む。細粒砂多く含む。
- 4 明褐色砂 (7.5YR 5/8) しまりなし。粘性なし。中粒砂主体。細粒砂・粗粒砂多く含む。
- 5 にぶい黄褐色砂 (10YR 7/6) しまりなし。粘性なし。細粒砂主体。中粒砂多く含む。
- 6 灰白色砂 (10YR 8/2) しまりなし。粘性なし。細粒砂主体。
- 7 黄褐色砂 (10YR 5/8) しまりなし。粘性なし。細粒砂主体。
- 8 にぶい黄褐色砂 (10YR 7/2) しまりなし。粘性なし。細粒砂主体。
- 9 黄褐色砂 (10YR 7/8) しまりなし。粘性なし。中粒砂主体。粗粒砂・細粒砂多く含む。
- 10 黄褐色砂質粘土 (10YR 7/8) しまりあり。粘性若干あり。細粒砂主体。



3 トレンチ西壁面土層

- 1 黄褐色砂質土 (10YR 5/6) 中粒砂主体。しまりあり。粘性なし。
- 2 黄褐色粘質土 (10YR 5/8) しまりなし。粘性あり。中粒砂少量含む。
- 3 明褐色砂 (7.5YR 5/8) しまりなし。粘性なし。中粒砂主体。細粒砂・粗粒砂多く含む。
- 4 にぶい黄褐色砂 (10YR 7/6) しまりなし。粘性なし。細粒砂主体。中粒砂多く含む。
- 5 灰白色砂 (10YR 8/2) しまりなし。粘性なし。細粒砂主体。
- 6 黄褐色砂 (10YR 5/8) しまりなし。粘性なし。細粒砂主体。
- 7 にぶい黄褐色砂 (10YR 7/2) しまりなし。粘性なし。細粒砂主体。
- 8 明黄褐色砂 (10YR 7/6) しまりなし。粘性なし。中粒砂主体。粗粒砂・細粒砂多く含む。
- 9 黄褐色砂 (10YR 7/8) しまりなし。粘性なし。中粒砂主体。粗粒砂・細粒砂多く含む。
- 10 黄褐色砂質粘土 (10YR 7/8) しまりあり。粘性若干あり。細粒砂主体。

第 56 図 年の神道跡 (B地点) トレンチ土層図

年の神遺跡（追加資料報告）

本資料は、B地点調査区の東側に位置する調査地点（平成27年度調査地）から出土していた遺物をここで追加報告するものである。

発掘調査は福祉施設の増築に伴うもので、『玉名市内遺跡調査報告書X』（2018）において報告しているが、その中で未掲載となっていた遺物があったため、今回改めて数点の実測を行った。

調査区内の主な遺構は、弥生時代中期を中心とした10数基の土坑と1基の裏棺墓であり、土坑の2基からは多量の貝殻（カキ主体）と共に、獣骨や種子なども検出されている。

掲載した土器2点は、いずれも弥生時代中期のS11（直径約1mの円形土坑）から出土している。16は裏とみられ、くの字状に張る最大胴部に線刻文様があり、外面下半部にはミガキが施されている。17は壺もしくは甕で、全体にミガキが施され、頸部外面には縦方向の暗文がある。赤色顔料の痕跡は肉眼では確認できない。18は、確認調査時の1トレンチから出土している打製石斧である。安山岩製でやや小型である。19と20は、いずれも調査区

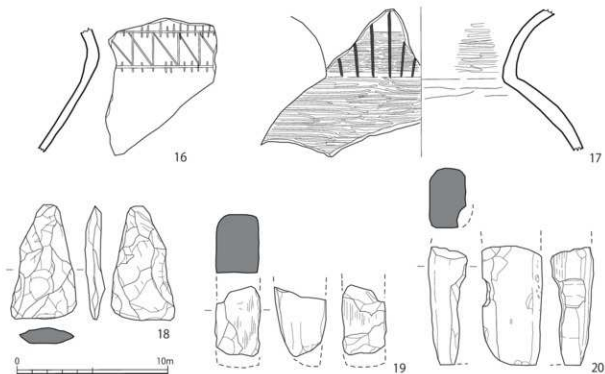


第57図 年の神遺跡周辺調査区位置図

の2・3層（包含層）から出土している柱状片刃石斧の破片である。変成岩と層灰岩製であり、20には、抉り部分に残っている。周辺の大原遺跡から類似した石斧が2点出土している。

<参考文献>

玉名市教育委員会『玉名市内遺跡調査報告書X』2018



第58図 年の神遺跡（B地点）周辺出土土遺物実測図

1.5 今見堂遺跡

所在地：築地 140 番 2

調査原因：店舗

対象面積：4,622.15㎡

調査日：令和 4 年 3 月 15 日～16 日

調査者：中村安宏

調査地は、境川右岸の玉名台地上に位置する標高約 16 m の地点である。当遺跡は、現在の県道（旧産業道路）が建設される以前から五輪塔や中世期の古銭・人骨片などが確認されており、遺跡名となっている「今見堂」という小字名からも中世にお堂や墓地在存在していた可能性がある。

西側は平成 9 年度に市道築地立願寺線建設工事に伴い発掘調査が実施されており、弥生時代と考えられる土坑数基 7 などが検出されている。

しかし、南側にある店舗や有明広域消防署の建設に伴う確認調査では、広域にトレンチを設定して調査したものの、遺構も遺物も全く検出されなかった。

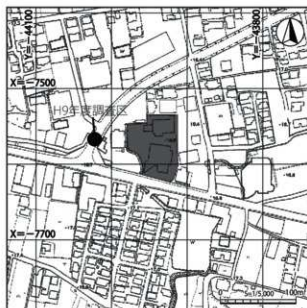
南東側に溜池があるように、周辺は浅い谷となっており、消防署付近の調査地点でも掘削してしばらくすると下から水が湧いてくる状況であった。

そのような土地条件から、生活の場には適さなかったのかもしれない。

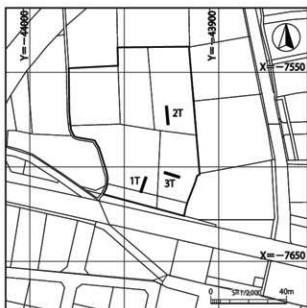
当該地には以前から店舗が建っており、建物部分以外はアスファルト舗装されていたため、既存建物が解体され更地となった後に確認調査を実施した。

調査では、基礎フーチングや柱状改良杭、地中梁が入る部分を中心に 3 か所のトレンチを設定し、埋蔵文化財の状況を確認した。その結果、基本的に基盤層の上位は客土であり、以前の店舗工事の際に大幅な攪乱を受けているものと考えられ、遺構や遺物は確認できなかった。

工事の内容は、自動車販売店の移転新築工事であり、確認調査の結果から慎重工事となった。



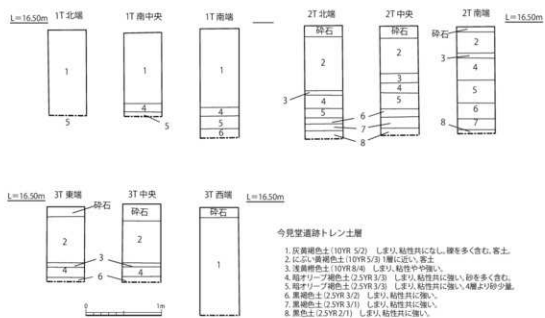
第 59 図 今見堂遺跡調査位置図



第 60 図 今見堂遺跡トレンチ配置図



写真 27 今見堂遺跡調査地（北から）



第 61 図 今見堂遺跡トレンチ土層図

写真 28 今見堂遺跡調査状況



1 トレンチ調査状況 (北から)



2 トレンチ調査状況 (南東から)



3 トレンチ調査状況 (西から)



3 トレンチ土層堆積状況 (西から)

Ⅲ 未報告資料紹介



保多地蔵跡群（2号蔵跡）の現況

1 石貫ナギノ横穴群

所在地：玉名市石貫

調査原因：玉名高校考古学部活動

調査日：昭和40年8月

調査者：田添夏喜・玉名高校考古学部

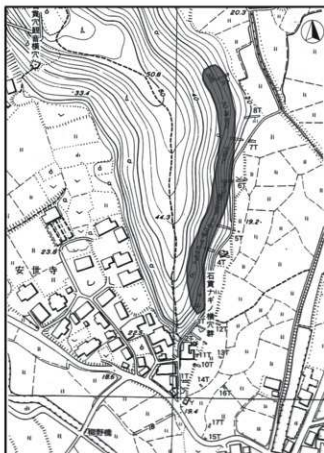
今回、報告する資料は、昭和40年8月に玉名高校考古学部によって調査された際の出土品である。

夏休み中の合宿調査であり、数基の横穴墓内の実測が実施され、その時に検出された鉄器と考えられる。市文化財整理室に田添夏喜氏の実測図が残されていたため、ここで報告するものである。

整理室に残されていた図面は他に1号、4号、5号、9号墓の実測図（製図）があり、これらの鉄器も他の図面と照合し、3点は「6号墓」からの出土と判明したが、当時と現在の横穴墓の敷え方が異なっているため、まずその検証を行う必要があった。

昭和58年に発行されている『玉名考古学部報33号』の記述には「当時から風化が進行しつつあったため、早急な実測調査を実施した」とあり、全体像を記録するため昭和55年から測量調査に着手し、以後継続しながら昭和58年に完了、報告という流れがあったようである。この当時、確認されていた横穴数は44基（現在は48基）と記録されている。恐らく、北側の最も奥に離れて並ぶ3基と、南側（一番手前）の1基が含まれていないものと推測される。昭和55年の熊本大学考古学研究室による調査時と同様で、横穴番号に若干のズレがある（第2表参照）。現在の全48基と報告されたのは、昭和56～58年にかけて熊本県教育委員会が調査し、昭和59年に刊行された『熊本県装飾古墳総合調査報告書』からである。

このように横穴墓数の認識が異なっていたことを前提に、当時の実測図を比較すると、昭和40年時の「6号墓」が、昭和58年時の実測図では「7号墓」、さらに熊大調査時と現在では「5号墓」となっていることがわかった。このことから、今回報告する3点の鉄器は、6号墓出土ではなく、現在でいう「5号墓」からの出土ということになる。よって、5号



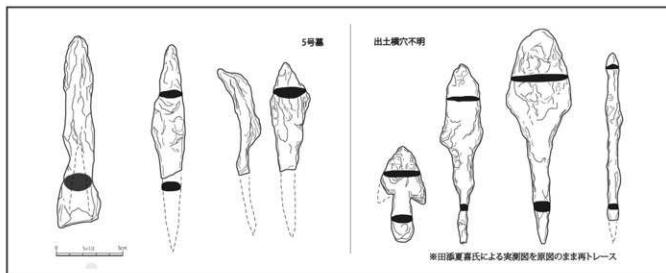
第62図 石貫ナギノ横穴群位置図

墓の実測図及び写真も掲載している。

鉄器は、左3点までが5号墓出土と判明したが他の4点は出土横穴が不明である。一番左は鉄矛で下半の中が空洞となっている。他はすべて鉄鎌である。鉄矛は、市内では他に大坊古墳から出土しており、近隣では江田船山古墳からも出土例がある。

今回報告した鉄器現物は残念ながら所在不明となっており、遺物写真もない状態ではあるが、実測図のみは掲載することにした。また、玉名高校考古学部による当横穴群の数回にわたる調査によって検出された須恵器は、市歴史博物館こころピアに寄贈されており、甕や高坏の破片が含まれる。出土した横穴の番号が注記されているものもあるため、今回の検証で明らかとなった番号のズレを照合すれば、須恵器が出土した横穴の特定が可能である。

<参考文献>
熊本県教育委員会『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告書第68集 1984
西住俊一郎・宮本千絵編『石貫ナギノ・石貫穴群古墳六部』金華会 1980
玉名高校考古学部編『石貫ナギノ横穴古墳群実測図』玉名考古学部報33号 玉名高等学校 1983
末永弘編『石貫ナギノ横穴群』玉名市文化財調査報告書第14集 玉名市教育委員会 2005

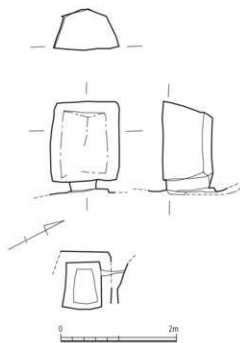


第 63 図 石貫ナギノ横穴群出土鉄器実測図



第 64 図 石貫ナギノ横穴群配置図(部分)

(熊本県教育委員会 1984 より)



第 65 図 石貫ナギノ横穴群 5号墓実測図

(※西住・宮本 1980 より)

S40年	S56年	S55年	現在
—	(1号)	—	48号
1号	2号	—	47号
(2号)	(3号)	1号	1号
(3号)	4号	2号	2号
4号	5号	3号	3号
5号	6号	4号	4号
6号	7号	5号	5号

第 2 表 石貫ナギノ横穴群番号対応表



写真 29 石貫ナギノ横穴群 5号墓(左)と6号墓(右)

2 幅木遺跡

所在地：玉名市富尾字岩原
 調査原因：造成時採集
 調査日：昭和43年10月
 調査者：田添夏喜

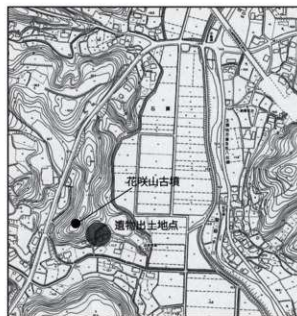
当遺跡は繁根木側右岸の小岱山から西へ傾斜していく裾部に位置している。標高23～47mの範囲に包蔵地が広がっており、以前は岩原遺跡として周知されていた。また、同じ包蔵地内の標高38mの小高い丘陵上には花咲山古墳が所在し、箱式石棺が確認されている。南側の別丘陵には富尾浦谷横穴群(2基)や富尾原横穴群(16基うち6基に装飾)などの横穴墓群が多く所在している。

今回、報告する資料は市文化財整理室に保管されていた田添夏喜氏資料を整理中に発見した「玉名市富ノ尾字岩原2-23番地出土・各種土器実測図」を再トレスしたものである。実測されたのは「昭和43年10月」とあり、実測者が田添氏本人であることまでは記録されている。

当初、富ノ尾出土の須恵器ということで、富尾原横穴群からの出土品ではないかと調べていた。しかし、出土した地番が違うため地図で検索したところ、この地番にあたるものが富尾には存在しないことがわかった。実測図に書かれた「岩原」で、かつて岩原遺跡として扱っていた現在の「幅木遺跡」であることが判明した。しかし、地番が現在と一致する地点はなかった。

昭和30年代後半に田道哲夫・田添夏喜氏らによって作成された「埋蔵文化財包蔵地調査カード」によれば、「完形須恵・土師器多数」とだけあり、当時の情報が乏しいが、おおまかな出土地点が示されていたことにより、幅木遺跡の出土品であることは間違いないことが証明されたため、実測図を掲載することにした。

出土した年代は明確でないが、先の包蔵地調査カードが作成されたのが昭和38年頃で、実測されたのが昭和43年であるから、その間に何らかの造成の際に偶然出土したものと考えられる。出土したとされる地点は遺跡範囲では単独に南へ突出する岬状



第66図 幅木遺跡の遺物出土地点位置図

の麓であり、まさに花咲山古墳がある丘陵の南側突端部にあたる。ここは挟られて畑や民家があるが、これらを整地する際に出土した可能性がある。

須恵器と土師器の完形高坏のみがセットで出土していることを考えると本来は古墳もしくは横穴墓があった可能性も否定できない。現地踏査の結果、凝灰岩の岩盤は確認できなかった。また、丘陵上に所在する花咲山古墳の存在も無視できない。この古墳が発見されたのは昭和57年であり、県営広域農道計画に伴う分布調査によるものであった。その時に確認された箱式石棺墓はいまだ未調査のままであるが、この屋根上にはまだ古墳などが存在している可能性が極めて高い。

今後、さらに踏査するなど分布調査が必要で、今後の開発行為にも注意が必要である。

実測図の左列が須恵器の長脚高坏である。一番下は釜みがみられ、口縁部が一部欠損している。いずれも脚部に透かしは認められず、時期は6世紀末から7世紀代とみられる。右列が土師器の高坏で、一番上が短脚である。市内における完形須恵器の出土例は多くはないが、玉名市下の城ノ浦横穴墓や近隣では荒尾市の野原古墳群、野原八幡台古墳群において類似した須恵器などがあ



※田部夏喜氏による実測図を原図のまま再トレース。縮尺不明。

第 67 図 幅木遺跡出土遺物実測図



写真 30 幅木遺跡遠景と遺物出土地点付近（東から）

3 保多地窯跡群(1・2号窯跡)

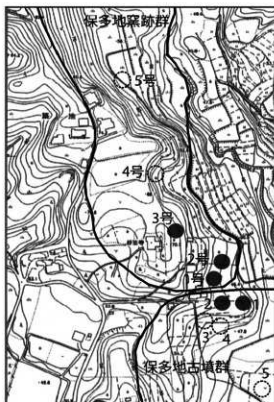
所在地：玉名市山田保多地 687-2 ほか
 調査原因：小岱山生産遺跡調査
 調査日：昭和 52 年頃
 調査者：田添夏喜ほか

当窯跡群は、小岱山から南側へ延びる標高約 50～60 m 丘陵上に位置している。市内で確認されている唯一の須恵器窯として重要で、「荒尾窯跡群」の支群にもなっている。現在は、妙法寺や数軒の民家があるのみで、ほとんどはみかん畑となっている。また、南側には接するように保多地古墳群が所在している。横穴式石室などが 5 基あったとされるが、1・2 号墳を除いてほとんどが消滅している。

当窯跡の発見は古く、大正時代にまず 1・2 号窯が確認された。市博物館に寄贈されている玉名高校考古学部資料の中にも、「昭和二年」と採集年が注記された須恵器が含まれており、古くから知られていたことがわかる(写真 31)。その後、地権者によってみかん畑造成中に 3 基(3～5 号窯)が発見された。現在、北側の 4・5 号窯は消滅しており、3 号窯跡のみ完全に残存しているといわれている。

平成 24 年度に現地踏査を実施しているが、その時点で今回報告する実測図は把握していなかったため、詳細不明としていた(蛋父 2017)。踏査時の 1・2 号窯跡は、床面が露出した状態で、みかん畑の中に風化した焼土や硬化面がみられ、須恵器片もわずかに散布していた。

当窯跡が発掘調査されたのは、小岱山の荒尾窯跡群や製鉄遺跡が調査された時期と同じで、昭和 52 年に調査報告がまとめられているが、「保多地窯跡群」に関しては確認できていない。「玉名市埋蔵文化財包蔵地調査カード」の田添夏喜氏の記述によれば「1 号窯は、最南端にあり床面のみ残存。他の部分は風化消滅。幅 1.4 m、長さ不明だが元は 6～7 m はあったとみられる。」、また「2 号窯は、1 号窯より 4 m 離れ、幅 1.4 m、長さ現存 5 m だが、昭和 30 年時は 7 m あった。床面は 11 度傾斜し、南壁 80 cm、北壁は上部を失うも 60 cm 残る登り窯。焚口と煙道は風化消滅している」とある。このなかで

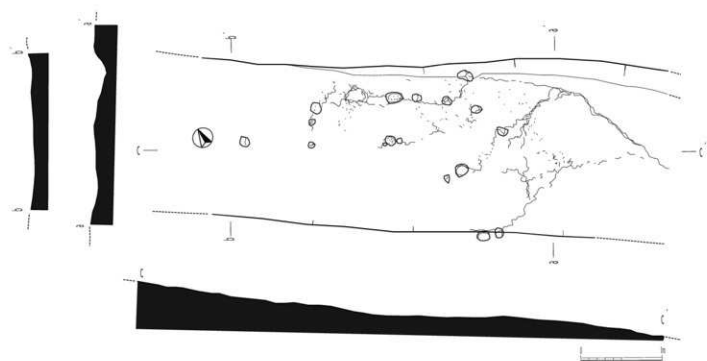


第 68 図 保多地窯跡群位置図

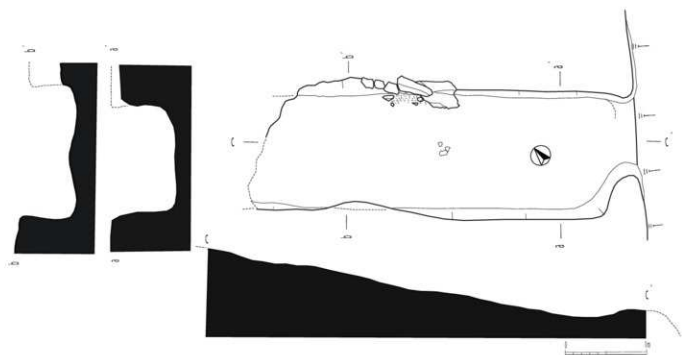
確実なことは、東側が焚口であったことと、床面の傾斜が緩やかということである。荒尾窯跡群の床面が 35～37 度と急勾配であるのに対して、当窯跡群は、いずれも 10 度前後と緩やかである。時期も古墳時代とされているが、採集されている須恵器からも、最盛期は古代であったと考えられる。なお、残存しているとされる 3 号窯跡は、「煙筒部(径 25 cm、垂直長 40 cm)の中に支柱を設けてあり、赤く焼けている。現在は土を入れて、挿鉢をかぶせて保存してある」と記されている。



写真 31 保多地窯跡群採集の須恵器(市博物館蔵)



1号窟跡



2号窟跡

※いずれも田添夏喜氏による調査時実測図をもとに一部改定して再トレース。

第69図 保多地窟跡群 (1号窟・2号窟) 実測図

4 池田地下式坑群

所在地：玉名市岩崎池田 674 番地
 調査原因：宅地造成時か
 調査日：昭和 50 年 12 月 21 ～ 27 日
 調査者：田添夏喜・玉名高校考古学部

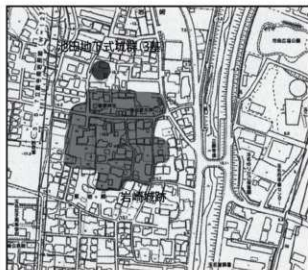
当遺跡は、繁根木川右岸の台地上（標高約 16 m）に位置している。昭和 30 年頃から地下式坑の存在が知られており、これまで 3 基が確認されている。「玉名市埋蔵文化財包蔵地調査カード」によれば、田邊哲夫氏によって当初「岩崎穴窟」と呼ばれていたようである。最初に発見されたものは、「一辺 2.5 m の方形の床面、高さは 1.8 m でドーム状の天井部分がある。天井から斜め上方に径 80cm の穴が高さ約 90cm 続いている。中世の墳墓ではあるまいか」と記述されている。

次いで昭和 50 年にも同地点から 2 基発見されている。このうち、「2 号」とされた地下式坑が今回報告する実測図である。これも市文化財整理室で図面が確認できたものである。

2 号地下式坑は、調査を指揮した田添夏喜氏の記述によれば「地表から 0.8 ～ 1 m 下に、縦 2.3 m、横 2.4 m、高さ 1.7 m ほどの大きさで、平床角型隅丸の穴を掘り、入りの浅いドーム形の天井をつくる。北側には床より高い位置に、幅 50cm、長さ 90 cm ほどの斜孔があり、地上への通路とみられる。壁面には鉄製蹴らしい掘削痕が明瞭にみられる。土坑は東西方向に 2 基、約 6 m の間隔をあけて検出した」とある。また、実測図から床面に近いところで 50 数点の石材が検出されている。下の断面は見通し図になるが、特に西端は人為的に敷き並べたようにも見受けられる。寿福寺跡においても、礎石や木材が下部において検出されている例がある。

<市内における地下式坑について>

市内において、このような地下式坑は数か所で発見されている。寿福寺跡・伊倉城跡に関しては報告書が刊行されているため参考にしていただきたい。なお、近年寿福寺跡の南側、繁根木遺跡群の調査地においても 1 基検出され瓦器などが出土し、旧産



第 70 図 池田地下式坑群位置図

業道路（現：県道）建設の頃にも、文化センター西側市道沿いで 5 基確認されている。寿福寺の関連遺構としてその分布域の広さを示している。

南出遺跡は昭和 36 年に同じく産業道路建設に伴う店舗造成によって 2.6 m ほど切土された地点から、約 2 m 四方、高さ 1.5 m の地下式坑が検出されている。通路と考えられる円筒状の穴が斜めに開口しており、壁面には鉄製工具による掘削痕が認められている。

田島地下式坑は、現在の春出遺跡の範囲になり、中世城館である中村館推定地の南端にあたる。慶専寺門前の巴道南壁において、昭和 49 年に車庫掘削時に検出されている。1.8 × 1.9 m 四方で、深さ約 1.7 m 規模のものが 2 基並んでいたという。

南大門遺跡からは昭和 35 年、農作業中に天井が陥没して発見、2 × 1.9 m 四方、深さ約 1.5 m のプランに岩盤を削り、人が通れるほどの斜傾を開けてあったという。遺物は確認されていない。

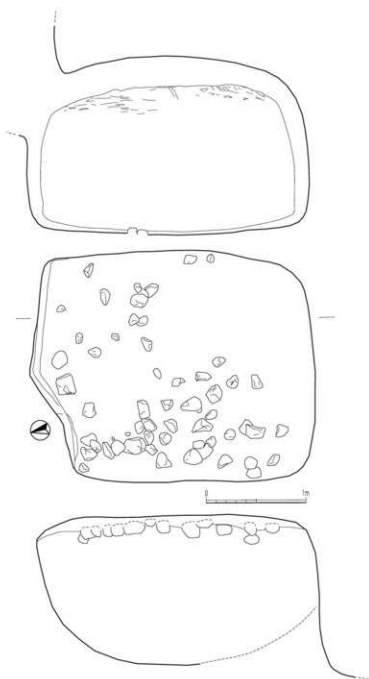
伊倉城跡は、高台である城内の南東端において、トレンチ調査で 1 基検出されているが、周辺にはまだ残存している可能性が高い。天井が崩落していたものの、1.2 × 1.0 m 四方の正方形に近いプランで、深さは 1.9 m。やや斜めに入口があったとみられ、閉塞石と考えられる礎、安山岩、軽石が多く落ち込んでいたという。出土した石白や瓦器（火鉢）などから 13 世紀後半～14 世紀代とされている。気になるのは、落ち込んでいた板石が本来は上部に

墓石のように建てられていたのではないかとこの点で、火を受けた痕跡も認められている。

このように市内では中世寺院や中世城館付近において多くが検出されており、当初は古墳時代の地下式横穴との関連も考えられてきたが、ほぼ戦国時代の可能性が高い。土坑の大きさも平均値は 2.0×1.9 m四方で、天井までの高さも1.7 m前後であ

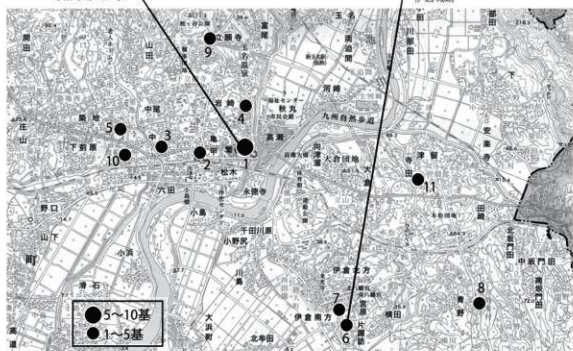
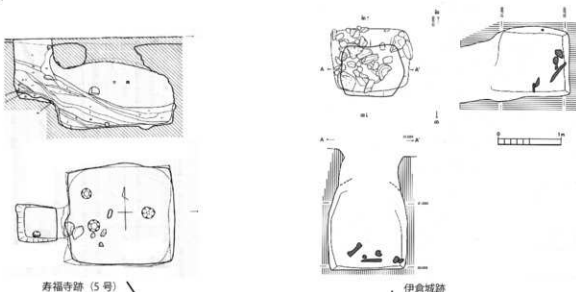
る。しかし、寿福寺跡に関しては、やや特殊で土坑規模の平均値が 3.0×2.5 m、高さも1.9 mと大きく、遺物が豊富である。群をなして形成されているものと考えられ、全体で10基を超えている。

地下式坑は千葉県を中心とした関東地方に多く分布し、九州においては福岡・大分が多く、次いで熊本とほぼ北部九州から中九州に集中している。



※玉名高校考古学部による調査時実測図をもとに再トレース。

第71図 池田地下式坑(2号)実測図



遺跡名	所在地	掘削	高さ	形状	数	特徴・出土遺物など	調査年など
1 寿福寺跡	繁根木	3.0×2.5m	1.9m	隅丸方形	10	三結片・中国産銅器器出土	昭和53年、市道内から発見
2 南出地下式土坑	中・内田	2.0×2.0m	1.5m	方形	1	内装に明瓦の埋め込み	昭和36年・玉名高校考古学部
3 南出地下式土坑	中・田島	1.9×1.8m	1.7m	方形	2	内装に明瓦の埋め込み	昭和49年・田島夏彦
4 南出地下式土坑	岩崎町	2.4×2.3m	1.7m	隅丸方形	3	径約0.5m 磁器瓦切破	昭和30・田本・昭和49年・田道
5 南大戸遺跡	坂橋町大戸	2.0×1.9m	1.5m	隅丸方形	1	萬葉集中に記載	昭和38年・田道夏彦
6 伊倉城跡	伊倉	1.2×1.0m	1.9m	隅丸方形	1	漆・板石・石臼・火鉢・鳥骨	市立歴史博物館「シニア
7 宮原遺跡	伊倉		詳細不明		1	伊倉小学校敷地内	平成時代に確認
8 宮野地下式土坑	宮野本村	2.0×2.0m	約1.5m	方形	1	掘削中に盗改	昭和35年・東京武
9 松原遺跡	石原		詳細不明		3	道路拡充中	平成時代に確認
10 大坂西遺跡	信甲町野口		詳細不明		1	発掘中に盗改して発見	本誌10号・田山彦
11 寺田久保遺跡	寺田久保	約3m四方	不明	方形	1	堀の工事現場中に発見	昭和30年代か・田道夏彦

第72図 玉名市内における地下式土坑分布図

県内でみると玉名周辺と宇土半島に集中する傾向があるという (8011:2009)。全国的にみて、時期は15世紀後半～16世紀代とされ、性格については墳墓説や倉庫説など様々ある。地下室の規模は大きいもので4m四方のものもあるが、玉名においては寿福寺跡が全体的に大きい傾向がある。寿福寺跡の出土遺物も時期が同じで、三結片などの出土例は稀だ

が密教と比較的近い要素を持つとされる。付近に補陀落波海碑も存在することから、地下式坑の性格について、捨身求菩提を果たそうとする仏教行為との関連が指摘されている (8011:2009)。

＜参考文献＞
 福田明一「地下式坑の西国伝説と戦国期の墓制」『中世の地下室』東田中世考古学研究会 2009

第3表 令和3年度市内道路試験・確認調査出土遺物観察表

調査地点	出土品名	種類	数量	長さ	幅	厚さ	重量	出土層	出土状況	色	形状	備考
1	2T-3層	赤土器	壺	—	(5.2)	—	—	ハケノナ子	ハケノナ子	灰黄褐色	白色砂粒・角質石を多量に含む	良
										10YR4/2	白色砂粒・角質石を多量に含む	
										10YR4/2	2m以下の層で、長石を少量含む	
2	山田久保平野跡(旧地蔵)	土器器	高坏	—	10.0	—	—	ナ子	ナ子	にふい黄褐色	2m以下の層で、長石を少量含む	良
										7.5YR6/4	2m以下の層で、長石を少量含む	
										7.5YR6/4	2m以下の層で、長石を少量含む	
3	2T-3層	土器器	壺	—	(21.7)	—	—	ハケノナ子	ケズリ	にふい黄褐色	2m以下の層で、長石を少量含む	普通
										10YR6/4	2m以下の層で、長石を少量含む	
										10YR6/4	2m以下の層で、長石を少量含む	
4	3T	陶器	碗	—	7.3	—	—	陶片	陶片	黄灰色(2.5Y4/1)	2m以下の層で、長石を少量含む	良
										2.5Y4/1	2m以下の層で、長石を少量含む	
										2.5Y4/1	2m以下の層で、長石を少量含む	
5	東光寺	2T	磁器	—	3.1	(2.2)	—	磁片	磁片	灰白色(N/8)	層状	良
										N/8	層状	
										N/8	層状	
6	1T	磁器	皿	—	4.1	(1.7)	—	磁片	磁片	灰白色(N/8)	層状	良
										N/8	層状	
										N/8	層状	
7	玉名平野遺跡群	表採	土器器	—	4.6	(1.5)	—	高台以外磁片	磁片	オレンジ黄色	2m以下の層で、長石を少量含む	普通
										7.5Y5/3	2m以下の層で、長石を少量含む	
										7.5Y5/3	2m以下の層で、長石を少量含む	
8	1T-4層	縄文土器	鉢小	—	(2.7)	—	—	ナ子後に原文	ナ子	にふい黄褐色	2m以下の層で、長石を少量含む	普通
										7.5Y5/4	2m以下の層で、長石を少量含む	
										7.5Y5/4	2m以下の層で、長石を少量含む	
9	山田久保平野跡(旧地蔵)群(旧地蔵)	土器器	皿	—	7.3	(1.4)	—	回転ナ子	回転ナ子	にふい黄褐色	2m以下の層で、長石を少量含む	普通
										10YR6/4	2m以下の層で、長石を少量含む	
										10YR6/4	2m以下の層で、長石を少量含む	
10	2T	青磁	碗	—	(1.4)	—	—	陶片	陶片	オレンジ黄色	層状	良
										7.5Y5/3	層状	
										7.5Y5/3	層状	
11	1T	青磁	碗	—	(1.9)	—	—	陶片	陶片	オレンジ黄色	層状	良
										5Y5/2	層状	
										5Y5/2	層状	
12	幸田久保遺跡	1T	須臾器	小型壺	10.0	—	(5.5)	回転ナ子	回転ナ子	オレンジ黄色	層状	良
										5Y5/2	層状	
										5Y5/2	層状	
13	高田遺跡群	須臾器	壺	—	(9.2)	—	—	回転ナ子後に原文	回転ナ子	オレンジ黄色	層状	良
										5Y5/2	層状	
										5Y5/2	層状	
14	高田遺跡群	須臾器	壺	—	(10.2)	—	—	格子目ナ子	格子目ナ子	灰色(7.5Y5/1)	2m以下の層で、長石を少量含む	良
										7.5Y5/1	2m以下の層で、長石を少量含む	
										7.5Y5/1	2m以下の層で、長石を少量含む	
15	年の神遺跡(042調査年度)	須臾器	壺	—	(11.5)	—	—	格子目ナ子	格子目ナ子	褐色	2m以下の層で、長石を少量含む	良
										7.5YR4/4	2m以下の層で、長石を少量含む	
										7.5YR4/4	2m以下の層で、長石を少量含む	
16	S11	赤土器	壺	—	(8.2)	—	—	ナ子後に原文・2ナ子	ナ子	明赤褐色	層状	良
										5YR6/4	層状	
										5YR6/4	層状	
17	S11	赤土器	壺	—	(9.3)	—	—	ハケノナ子	ハケノナ子	にふい黄褐色	層状	良
										10YR5/4	層状	
										10YR5/4	層状	
18	1T内	打製石器	石片	7.5	4.4	11.99	(個)	—	—	—	—	—
										(個)	(個)	
										(個)	(個)	
19	磁器器	磁器器	磁器器	—	4.6	3.4	21.7	—	—	—	—	—
										(個)	(個)	
										(個)	(個)	
20	磁器器	磁器器	磁器器	—	7.9	2.5	60.2	—	—	—	—	—
										(個)	(個)	
										(個)	(個)	

